

## 羽鳥ルツ作 「進化論をぶっ飛ばせ II」

<前編> 人間はゾウリムシだったの？

松本由美子 どうしよう。困ったなあ。

今野美加 由美子、何そんなに困ってんの？

由美子 あれよ、あれ。生物のレポート。やった？

美加 ああ、あれ？「地球の誕生と進化」？ うん、まあ一応やったけど。

由美子 いいよね。生物が得意な人は。

美加 別に得意ってわけじゃないよ。今回はさあ、ちょっと興味があったってだけでよ。

由美子 “興味があった”ってだけで十分だわ。わたしなんて興味の「き」の字もないわよ。それに美加は自分の考え持ってるから、すぐ書けるじゃない。「地球の誕生と進化」なんて考えたこともないし。どうでもいいのに。どうしてこんなの書かなきゃいけないのかしら。信じらんない。

美加 でもさあ。由美子は「人間が去るから進化しました」って言われて、「はいそうですか」って簡単に信じちゃうわけ？

由美子 信じる信じないも何も、そうとしか教えられてきてないもん。ほかに考えようがないでしょ。ねえ、美加はレポートどんなこと書いたの？

美加 うん、わたしはね、“人間が進化の産物だなんて信じられない”というようなこと書いたよ。

由美 ふーん。わたし、どうしようかな。

美加 まあ頑張ってよ。手伝えることがあったら、手伝ってあげるからさ。でも高いぞ。

由美子 マジ？ まあ頑張ってみるわ。

由美子ナレーション わたしは松本由美子。青春高校の1年生。普通の家で育った、ごく普通の女の子です。毎日友達とかと楽しく暮らしてるんだけど、問題は宿題なんです。なんか知らないけど、宿題好きな先生が多くて。生物のレポートもその一つ。結構困ってるんです。「地球の誕生と進化」というところをやっているんだけど、そんなこと今まで考えたこともなかったし、わたしにとってはどうでもいいことなのに、世の中にはそういうこと一生懸命に考えている人もいますねえ。わたしの親友の今野美加がそういう子なんです。普段はちょっと変わってて、面白くて、一緒にいて飽きない子なんだけど、自分の生き方のポリシーっていうのかな、そういうの持っていて、それと照らし合わせておかしいと思えば、先生だろうがだれだろうが、どんどん言っちゃうんです。なんかすごいなあって思います。

(効果音) (終業のチャイム)

先生 はい、今日の授業はここまで。それじゃあレポートは今週までだから。忘れるなよ。提出しなかったやつは冬休みないと思え。なんか質問あるか？

今野美加 先生。

先生 なんだ？

美加 あ、このレポートに、自分の意見を重視して書いたんですけど、構いませんか？

先生 ああ、お前な、なんかこの前の現代社会のレポートでも、聖書に基づいたヘンなやつ出したって、佐藤先生言ってたっけなあ。

美加 別にヘンなレポート出したつもりはないですけど。

先生 またそういうやつ書いたのか？

美加 でも、学校で教わったのって、わたしの信じてるものと全然違うんです。進化論では、すべて偶然の結果だといえますよねえ。例えば、最初の生物発生のことだって、たんぱく質が偶然できて、それがどういう訳か、これもまた偶然に生物に進化していった…。そんな起こるか起こらないか分からないような偶然が重なって、起こってしまったなんて不自然です！

先生 いや、一概に偶然が不自然だとは言えんぞ。おれが結婚したことだってな。

生徒 え、何、急に？

先生 二人とも、偶然に同じ大学で同じサークルで、そして同じ時期に失恋したから結婚できたんだよ。そういうのはすべて偶然が成す業だろ？ まあ、レポートというのは、自分の意見もいいが、客観的に見て書くことも必要だぞ。特に自然科学はな。

(効果音) (始業のチャイム)

先生 おいおい、次の授業が始まっちゃったじゃないか。まあ期待してるから、いいレポート書いてくれ。じゃあな。

生徒 おい、美加。お前、現代社会のレポート、何書いたんだよ。

美加 先生が言っていたこととさあ、聖書に書いてあることが全然違ったから、わたしは聖書のほうを信じますって書いたんだよ。

生徒 へえー。じゃさあ、今度の進化についてのレポートはよあ、アダムとイブのことでも書くのかよ。

美加 ああ、それもいいね。聖書の一番最初にさあ、「初めに、神が天と地を創造した」というのがあって、それから植物つくって動物つくって、一番最後に人間がつくられたんだよ。これって進化論と全然違うでしょう？

男子 そうだなあ…。

先生(女) そこ！ もう授業は始まってますよ。早く席に着きなさい。

美加・男子 はい。

ナレーション わたしは、今日的美加と先生、そして友達との会話を聞いていて、何か不思議な気持ちに襲われました。不安のような、けれども何か目の前が開かれていくような、そして何か大切なことを思い出せないでいるような…。わたしはそんな気持ちで家へ帰ってきました。

母 由美子お。お夕飯の片付け手伝ってちょうだい。

由美子 やーよー。わたし、レポート書かなきゃいけないんだから。

母 そんなこと言ったって、いつも勉強なんてしてないじゃないの。

由美子 うるさいわね。あ、そうだ。うちに聖書ある？

母 聖書？ あると思うけど…。だけどどうして？ 急に聖書なんて。

由美子 うん。ちょっと生物の宿題で使うの。

母 生物と聖書と何か関係あった？

由美子 うん、ちょっとね。

母 確か、お母さんが昔使っていた裁縫箱の奥にしまってるんじゃないかな。

由美子 ありがとう。探してみるわ。

(効果音) (ドアの開閉)

由美子モノローグ あったあった。うわっ、すごいほこり。神も黄色くなっちゃって。えーと、創世記…。「初めに神、天地をつくりたまえり。」古い言葉だけど、美香が言っていたとおりだ。「地は形なくむなしくして、やみ、ふちの面<sup>おもて</sup>にあり。神の霊、水の面を覆いたりき。」はぁ、ずいぶん難しいんだ。えーと、あ、ここに線引いてある。「神、そのかたちのごとくに人をつくりたまえり。すなわち神のかたちのごとくにこれをつくり、これを男と女につくりたまえり」か、ふーん。

(効果音) (ドアの開閉)

母 見つかったの？

由美子 ねえ、お母さんはさぁ、神様って信じてる？

母 別に信じてるわけじゃないけどね。

由美子 この聖書、いつ買ったの？

母 ああ、これはね、お母さんが女学校の時にね、クリスチャンの英語の先生に頂いたのよ。

由美子 お母さんは創世記って読んだ？

母 ひとつおり読んだけど、分からなかったわねえ。

由美子 じゃあ、人が神様につくられたっていうの、信じた？

母 アダムとエバの話？ あれは神話でしょ。

由美子 ふーん。神話なんだぁ。ねえ、これちょっと貸してね。部屋で読んでみるから。

母 勉強もちゃんとしなさいよ。

由美子モノローグ これって神話かなぁ。でも美香はあんなに真剣に話していたもんね。少なくとも美加にとってはただの神話じゃないはずよね。でも聖書に書いてあることと、

生物の授業でやった“進化”って本当に違う。この聖書には、植物は植物として、動物は動物として、人間は人間としてそれぞれつくられたって書いてある。でも学校では、動物から人間に進化してきたって教えられたし、そう信じてきたけど、一体どっちが本当なんだろう。こんなに精巧な人間の体ができしたのは、本当に偶然の積み重ねなのかなぁ。昔は人間は猿で、その前がカエルで、その前が魚で、その前がゾウリムシ？ どう考えたって、そんなのないよなぁ…。

ナレーション わたしはいろんなことを考えながら、その難しい聖書を読み進んでいきました。

由美子モノローグ あだむというひとがさいしょの人間で、神様にとても大事にされてたんだ。

ナレーション わたしは、そのまま深い眠りに落ちていきました。しばらくたって、わたしは誰かに起こされました。わたしの目の前には、優しくのぞき込んでいる見知らぬ男の人の顔があったのです。驚いて辺りを見回すと、そこは広い森の中でした。

由美子(エバ) え？ あなたはだれ？ ここはどこ？

アダム ヤだなぁ。寝ぼけてるのかい？ 僕はアダムで君はエバ。そしてここは神様がくださったエデンの園じゃないか。一体どんな夢を見てたんだい？

由美子(エバ) 愛...？ ちょっと待って。アダムって、もしかしてあの聖書の最初に人間？

アダム いつまで寝ぼけてるんだよ。僕が初めに神様につくられて、そして僕のあばら骨から君がつくられたんじゃないか。さぁ、もう起きなよ。そして泉で顔を洗っておいで。そしたら目が覚めるよ。

ナレーション わたしは、何がなんだか分からないまま、言われたとおりに泉に顔を洗いに行って、自分の顔をのぞき込みました。

由美子(エバ) あら、だれこれ？ わたしはだれなのかしら。

アダム おーい、エバ！ 目は覚めたか？

由美子(エバ) エバ？ エバ…。それがわたしの名前？

アダム どうしたんだい？ 今日の君は少しヘンだよ。

由美子(エバ) キャー！

ナレーション わたしはその時、大きな叫び声を上げました。茂みの中に、大きな動くものを見つけたのです。

#### <後編> 神のかたちに

ナレーション わたしは松本由美子。青春高校の1年生。生物で進化論についてのレポートの宿題が出てるんだけど、そのことでこんなに考えさせられるなんて思ってもみませんでした。というのは、わたしにとって進化論は常識として受け止めていたけれど、親友の美加はそうじゃない。神様が、最初から人間は人間としてつくられたんだって言うんです。わたしは家に帰って、母が昔読んだという聖書

を開き、最初の間、アダムの話を読みながら、いつしか眠りに落ちていきました。そして目を覚ますと、目の前にいるのはアダム、そしてわたしはエバなのです。その時わたしは、茂みの中に、大きな動物の姿を見つけ、思わず叫びました。

由美子(エバ)

キャー！

アダム

ど、どうしたの一体？ そんな声出して。

由美子(エバ)

あそこの茂みにいるの、ラ、ライオンじゃない？ ねえ、殺されちゃうよ。早く逃げなきゃ。

アダム

え、コロサレル？ 何それ？ コロサレルって何？ どういうこと？

由美子(エバ)

ライオンに食べられちゃうってことよ。早く逃げよ。

アダム

ライオンが人を食べる？ 何言ってんだよ。みんな草とか木の実とか食べて生きてるよ。神様が僕たちにそう言ったんだよ。やだな、何も覚えていないのかい？ じゃあ教えてあげるよ。

ナレーション

そしてアダムは、いろいろなことを教えてくれたのです。神様は 6 日間で全世界をつくれ、その最後に人間を、そう、まずアダム、そしてそのアダムからエバをつくられたこと。二人はエデンの園に住み、どの木の実も自由に食べていいが、善意を知る木からは、決して食べてはいけない、食べたら死ななければならないことなど。

わたしはいつしか自分がエバであると思えてきました。そしてそのことに安心感を覚えるようになりました。こうしてアダムとのすてきな生活が始まったのです。ところがある日、蛇が現れてわたしたちを誘惑したのです。

蛇

エバさん、神様は本当にあの園の真ん中の木の実を食べてはいけないといたんですか？ 絶対そんなことはないですよ。実はね、その実を食べるとあなたは神様のようにになれるんですよ。食べてみたらいかがですか？ 絶対兵器ですから。

ナレーション

わたしはその実に手を伸ばし、一口食べてみました。そしてそのおいしさに驚いたのです。

由美子(エバ)

なんておいしいんだろう。これは絶対アダムにも食べさせてあげなくっちゃ。アダム！ アダム！

アダム

どうしたんだい、そんなに慌てて？ ほら、こんなにたくさんの木の実を取ってきたよ。おいしそうだろ？

由美子(エバ)

そんなのよりも、もっとおいしいのを見つけたの。食べてみて。

アダム

こ、これは神様が食べてはいけないと言ったあの实じゃないか。なんてことしてくれたんだ。

由美子(エバ)

大丈夫よ。ほら、わたしだってピンピンしてるし、それにとってもおいしいの。平気よ。食べてみて。

アダム                   そうかい。それじゃあ一口…。

ナレーション           とうとうわたしたちは、神様が食べてはいけないといわれた実を食べてしまったのです。その時でした。

(効果音)               (あらしのような音)

神の声                   (エコー)アダム、エバ、どこにいるのかね？

ナレーション           神様がわたしたちを探しています。わたしたちは恐ろしくなって慌てて隠れました。

神の声                   (エコー)お前たちは、わたしがあれほどいけないと言った善悪の知識の木の実を食べてしまったのか！

アダム                   神様、僕じゃないです。エバです。

由美子(エバ)           わたしじゃありません。蛇です。

神の声                   (エコー)もういい。お前たちはわたしに対して罪を犯した。だからお前たちは永遠に生きることはできない。そしてこのエデンの園から出ていきなさい。

アダム                   神様！

由美子(エバ)           ごめんなさい、神様。ごめんなさい。

由美子                   (うわごと)ごめんなさい。赦して。ごめんなさい。

母                       由美子、由美子。何寝ぼけてんの？ もう起きなさい。学校に遅れるわよ。

由美子                   う…ん。え？ ああ、おはよう。あれ、夢かぁ。

ナレーション           でもわたしは、夢の中の出来事を、やけにリアルに覚えていました。わたしに触ったアダムの手の感触、不気味な蛇の顔、そして神様に怒られた時のあの怖さと惨めさ。まだ夢と現実がごちゃ混ぜになりながら、わたしは学校へと急ぎました。早く美加に会って話を聞いてもらいたかったのです。

美加                     おはよう、由美子。

由美子                   おはよう、美加。わたしねえ、エバになったの。

美加                     はぁ？ 何？

由美子                   わたしね、昨日美香の話聞いてて、家へ帰って聖書を読んでみたの。だけどそのまま寝ちゃって、そしたら夢の中でわたしがエバになってたの。

美加                     エバって、あの聖書の中のエバ？

由美子                   そう！

美加                     きっと神様が特別にエバにならせてくださったんだよ。すごいじゃない。

由美子                   あのね、ライオンとかすごくおとなしくかわいかったよ。

美加                     うん。一番最初、神様は植物をつくり、それから動物たちをつくり、彼らはすでにつくられていた草を食べるようにされたんだもんね。

由美子                   だけどね、わたし、蛇の言うこと聞いて、食べちゃいけない実を食べてしまったの。そしたら神様がすごく悲しまれて…。本当に神様に悪いことをしたと思う。あんなに何不自由なく面倒を見てくれたのに。

美加                   それが神様みたいに賢くなろうとした人間の、最初の罪だよ。それから人間はどんどん悪くなってしまって。神様は今でも同じように愛してくださるのに、わたしたちは分かってほしい。それどころか、動物から進化したなんて、それこそ神様、悲しまれるのにな。

由美子                そうなの？ そこんとこがイマイチわかんない。人間が最後につくられたっていう点では、進化論も聖書も同じなんだから、あの聖書の話も、少し科学的に説明したのが進化論と考えるのもいいんじゃないの？ 聖書の中でも、最後につくられた人間が、動物も植物もみんな治めてんでしょ？ だんだん進化して、その最も進んだかたちの人間が、劣ったものを支配するんだから、一番理想的じゃない。

美加                   うん。一見、由美子の言うこと、合理的だし、わたしも初めはそう考えてた。自分なりにものすごく悩んで、必至になって考えて、「そうだ、(効果音)考えれば聖書と進化論は矛盾しない」って、ちょうど今由美子が言ったようなこと、考えていたの。

由美子                ふん、そうだったの。でも... 違ってたわけ？

美加                   うん。なんとなく、どっかで引っかかって、行ってる教会の中高の先生に聞いてみたの。石井先生っていうんだけど。そしたらね、「うん、美加ちゃんのは、いいポイントを突いてるけど、大事な点を間違えてるよ」って教えてくれたの。

由美子                へえ。教会にも中高生のクラスとかあるわけ？ で、どこが違ってたの？

美加                   うん、あのね。わたしも進化論なんて難しくてよく分かんないけど、ひとつはね、もともと生物の存在しない地球に、現在のように何万という種類の生物ができてきたのは、これは、何十億年の間に単体生物から進化してきたとしか考えられないと、進化論者は結論づけたんだけど、もしこの説が正しければ、ある種からある種へと進化した、その中間の種の化石が見つかるはずなのに、それがひとつも見つかっていない。えーと、なんてったっけな、ミ、ミッシング... そう、ミッシング・リンク。

由美子                “失われた、鎖の輪”か。

美加                   さすが“英語の由美子”ね。そう、それは何を意味するかって言うと、地球上の生物は、それぞれ“種類に従って”、植物は植物として、動物は動物としてつくられたってことなんだよ。これは聖書の言ってるとおりなんだよね。そうでなきゃ、地球上には最も進化した生物しか残ってないはずでしょ。でも現実に、アメリカだって、トカゲだっているし、第一、猿が人間に進化したんなら、今いる何百種類の猿はなんなのよ。彼らも何万年かすれば人間になるわけ？

由美子                わたしもそのことは考えた。で、いつもなんとなくヘンだなあとは思ってたんだけど。

美加                   でね、この“種類に従ってつくられた”ってことがとても大事なんだって。だから、

例えば何百万年前の馬に指のように分かれたひづめがあって、それが現代の馬のようになったという事実は、“馬”という種類の中で、進化してきたということで、このことを聖書はちっとも否定してないんだって。

由美子

へーえ、そうなの？ ちっとも知らなかった。

美加

考えたんだけどね。神様が、すべてのものの創造者だってことが信じられたら、この“種類に従った創造”っていうことは素直に信じられるけど、神様が信じられなかったら、やっぱり偶然による生命の発生と進化という風にしか考えられないのになって思うわけ。

由美子

“神様の創造”か。わたしもね、この宇宙のこととか、山にキャンプに行った時、自然のいろんなものを観察なんかすると、とてもじゃないけど、こんなすばらしいものが、偶然になんかできっこないなあって思った。

美加

でしょ？ もうひとつね。石井先生が教えてくれたのは、進化論の誤りっていうより、その危険性っていうことなんだけど、結局、進化論っていうのは、進化の過程で、劣ったもの、弱いものは、より進んだもの、強いものにとって代わられ、滅ぼされていくって考え方でしょ。すると、優秀な人間が最後に登場し、世界を支配する。このような人間中心の考え方が突き進んでいくと、更にその同じ人間の中でも、劣勢な者は抹殺されて、優秀な者が生き残って当然、更にその人間の知恵を使って、もっと優秀な人間を人工的につくるべきだ、とどんどんエスカレートしていく。そこには、人間の自分中心の考え方が底に流れていて、之は聖書の言う“罪”に支配された考え方だっていうの。人間は、ほかの生物と同じように、創造者である神様につくられた、被造物に過ぎないんだという謙虚さを持たなきゃ、やがて人類は、自分で自分を滅ぼすことになるって。

由美子

(感に堪えないように)ふーん。そんな見方もあるんだあ。だけど美加、今の話、まだよく分かんないところもあるけど、なんかすごく説得力ある！ “創造者である神”か。そうかあ、うん、そうなんだ…。

美加

ね？ わたしも石井先生の話聞いた時、思わずうなっちゃった。しかも聖書ではね、神様は人間を、人間だけを、“ご自分のかたちに創造された”って言ってるんだよ。

由美子

あ、それ、お母さんが線を引いてたところ。

美加

だから神様は、特別に人間を愛していてくださるんだよね。どう、由美子、もっと聖書で神様のこと、そして自分自身のこと、考えてみない？

由美子

うん。美加、レポート書いたら、一度教会に連れてってよ。

美加

いいわよ。

ナレーション

わたしは、あの夢の中で味わった、神様と共にいた時の不思議な安らぎを、もう一度味わってみたいと、本気で考えたのでした。

<完>